

図書館展示 11/12月●2004

# エノケンさんに 会いにゆこう!



榎本健一 1904-1970

国立音楽大学音楽学部音楽学学科  
第20回研究発表会資料展

期間●11月10日～12月18日  
場所●図書館ブラウジングルーム

国立音楽大学音楽学部音楽学学科  
第20回研究発表会資料展

エノケンさんに会いにゆこう！

エノケンの青春時代	2
エノケンの舞台活動	3
エノケンのその後	6
参考文献	7



---

表紙の出典は「唄うエノケン大全集 蘇る戦前録音編」ユニバーサルミュージックより

---

明治 37 年(1904)、榎本健一は東京の青山に生まれた。のちにエノケンと呼ばれる喜劇役者の誕生である。

彼は幼少時代から活発で、学校をさぼっては当時東京の娯楽場だった浅草に出かけたり、若者の中で当時人気があった尾上松之助の活動写真に惹かれて、叔父を説得し京都の撮影所近くまで行ったりしていた。エノケンが少年時代をすごした大正時代は後の昭和につながっていく様々な娯楽やメディアが登場した時代でもあり、彼自身も音楽だけでなく、当時の映画や喜劇から影響を受けながら育ってゆく。

音楽好きだった彼は 10 代から独学でヴァイオリンを始め、初見の楽譜に対してはヴァイオリンを爪弾きながら歌えるほどになる。その頃のエノケンは家業を手伝いながらも俳優になりたいという夢を持っていた。そんな彼のもとに小学校の同級生が現れる。当時、浅草オペラの根岸歌劇団で活躍していた柳田貞一のもとに、弟子入り希望の手紙を出したから行けと言うのだ。エノケンは仕方なしに柳田本人を尋ねたが、彼のダミ声はとも当時の職業的歌手の条件にあてはまらなかった。それにも関わらず柳田は歌劇団に参加するようエノケンにいい、こうして彼は翌年、18 歳にして根岸歌劇団のコーラスボーイとなり初舞台を踏む。この歌劇団で彼は譜読みや台本を覚えこむ早さを買われ、代役を務めることもあった。また彼が出演するシーンでは必ずお客さんが笑うので、エノケンの名はこの劇場だけでなく浅草中に知られるようになっていった。

そんな中、昭和 2 年(1927)に起こった関東大震災は、東京の街に壊滅的なダメージを与えた。六区も全滅し、根岸歌劇団が抱えていた芝居小屋は、大阪から進出してきた松竹の手に渡った。松竹側は、経費が安上がりでしかも観客の動員率が高い活動写真に力を入れたため、オペラは衰退の一途をたどることになっていく。エノケンは震災後、京都で新しく組織されたオペラ劇団に参加していたが、浅草とは違った雰囲気的舞台に嫌気がさし東京に戻ってきてしまっていた。一方、浅草の舞台が焼け大阪で公演を行っていた根岸歌劇団は、そこでエノケンに再び声をかける。オペラが下火になった状況の中で、歌劇団に所属しているエノケンは暇になることが増えていったので、この頃は金竜館時代の仲間が集まり、八王子や甲府など少し外れの劇場オペラに出演していた。彼はこのような公演を経験する中で、新たにスピード感のある本格的な喜劇ができないものかと考えるようになった。そして当時、音楽を使って踊りと芝居をミックスした新しい喜劇が彼の中で浮かんでいたという。このエノケンが想定した「音楽」こそが、ジャズであった。

その後、東亜キネマに行かないかという友人の誘いで「何か新しい芝居が出来るかもしれない」と考えた彼は研究生として参加するが、ここでも彼は抜擢され無声映画に主役で出演した。このようなことから、彼の芝居がいかに周りをひきつけたのがよく伺える。また彼とのちに「エノケン・ヤマカジ」コンビとして数々の映画を共に撮影することになる 2 歳年上の山本嘉次郎という人物とも、この当時京都で出会っている。

～彼が所属した3つのレビュー団でご紹介～

### 1. カジノ・フォーリー

エノケンが初めて舞台に立った根岸歌劇団の、コーラスボーイ時代の友人であった石田守衛から、エノケンのもとに、浅草水族館でのレビュー団創立への参加をもとめられたのは昭和4年(1929年)7月のことである。

そもそもこのレビュー団成立には、浅草水族館の管理人であった桜井源一郎の親類、内海正性がパリで見えてきたボードビル・バラエティがきっかけとなっている。パリでは当時「フォーリー・ベルジェール」「カシノ・ド・パリ」「ムーラン・ルージュ」など、英米独各国のボードビルの舞台が人気を博していた。そんな舞台を見た彼は、経営が思うようにいかない水族館を復興させるのに、「ジャズ・レビュー・ボードビルをミックスし、それにドタバタ喜劇を取り入れたらどうか」という案を桜井に出した。結果的にこのレビュー団は昭和4年(1929)年7月10日、エノケンを助っ人に頼み、「カジノ・フォーリー」として旗揚げする。そこには当時イタリア音楽の翻訳をしていた徳永政太郎や、音楽に造詣がある内海正性、またのちにエノケンと好コンビになる中村是好をはじめとする俳優たちが参加していた。この時は2部構成の舞台で演劇と音楽がバランスよく上演されていた。しかし場所が浅草の外れで水族館だったからか客足はのびず、なんと早くも2ヶ月で解散してしまう。

しかし、その後すぐに「健一が中心になってもう一度カジノをやってくれないか」という話 came。そこでエノケン自らが座長格となり、仲間の中村是好、間野玉三郎、堀井英一と4人で<第2次カジノ・フォーリー>を、同じ年の10月26日に再開させる。今度は、1日3回公演、出し物は1回5本立てというサービスぶりで、その内容は次第に評判を高めていった。それにさらに拍車をかけたのが川端康成の小説「浅草紅団」である。彼の小説にはエノケンの舞台が登場し、またそれと時を同じくして人々の間で「金曜日になると踊り子がズローズ(胸に巻くさらし)を落とす」という噂が飛び交ったため、多くの観客で連日盛況していた。

エノケンはこのカジノ・フォーリーの舞台で、当時の最新の流行ジャズソングを多く取り入れていた。「私の青空」、「アラビヤの唄」、「洒落男」などがそれで、エノケン以前に、当時の人気ジャズ歌手であった二村定一が歌ってヒットさせたアメリカの曲である。現在でこそ、ジャズソングという言葉はあまり用いられないが、当時はこの言葉が、フォックス・トロット(註2)のリズムで歌われるアメリカのポピュラーソングだけに限らず、シャンソンやタンゴ、ハワイアンに至るまで、舶来ソング全体を指す言葉としてよく使われていたそうだ。ちなみにこのときのジャズソングをはじめとする楽譜に関しては、内海正性やその弟で画家の内海行貴が、横浜に着く外国船の楽士に頼んで外国から新しい譜面をいち早く取り入れていたということがわかっている。

舞台構成は、基本的に全3本立てである。第1部、第3部ではレビューと題するコメディを上演し、その間の第2部では音楽的要素に比重を置き、歌と踊りのヴァラエティーと題するショウが入った。取り寄せた最新の曲に歌詞をつけたものや、「君恋し」「都会交響楽」「夜の東京」など佐々紅華作曲でヒットした和製ジャズソング、「フー」「ティナティ

ナ」「月光価千金」など最新のアメリカのポピュラーソングも歌われている。ジャズ・ダンスや専属のバンドによる(リオリタ)のジャズ演奏や、ナンセンススケッチ(註3)とよばれる出し物も行われていたらしい。ちなみにこのバンドの編成はヴァイオリン、サクソ2人、トランペット、リズム3人の、合わせて7人であった。

川端康成は小説の中で、カジノ・フォーリーについて次のように書いている。

【「和洋ジャズ合奏レヴュー」という乱調子な見世物が、1929年型の浅草だとすると、東京にただ1つ舶来「モダアン」のレヴュー専門に旗挙げたカジノ・フォーリーは、地下鉄食堂の尖塔と共に、1930年型の浅草かもしれない。エロチシズムと、ナンセンスと、スピードと、時事漫画風なユウモアと、ジャズソングと、女の足と〜。】

第2次カジノ・フォーリーはむしろ水族館のメインにとってかわる人気となるが、ここでエノケンが独立し、新しい劇場に進出することになる。それが新カジノ・フォーリーである。当時水族館の人気をそのまま憧れの浅草六区(註4)に持ち込みたいと意気込み、エノケンは当時詩人で元ペラゴロであったサトウハチローを文芸部長に招き、内容の充実にもさらに力を入れ、その中にはなんと無名時代の菊田一夫もいたという。しかしその後座員の不和と、エノケンの体調悪化により2ヶ月で解散してしまった。

このように、大震災を境に次々に移り変わっていった東京の社会情勢に、人々の心理さえもが変わり、よりスピーディーになったとエノケンは感じていた。そして浅草オペラに見られる、のんびりした気風とは異なる現状に敏感に反応し、スピード感ある、そして観客を笑わせる新しい喜劇を、日本で自分が新たにやってみたくと願った。彼はその願いをこのカジノ・フォーリー時代に初めて実現させた。ここにおいて欧米喜劇映画にあるギャグやスピードだけでなく、震災前に根付いていた、浅草オペラおよび当時の浅草レヴューにあった要素も取り入れつつ、新たな喜劇を創り上げていったのである。

註1： 演芸の一種。独立した内容の歌や踊り、簡単な劇など各種の演芸が連続的に上演される風刺的風俗劇。

註2： アメリカの社交ダンス音楽。2分の2拍子か4分の4拍子。

註3： 現代でいうコントのこと。内容は詳しく分からないが当時の舞台では男性約7人で行われたという記録もある。

註4： 明治17年(1884)政府が浅草公園を6つの区域にわけ、6区には当時から見世物小屋、後には日本初の常設活動写真館や洋風建築の映画館もできるなど当時の舞台人にとって憧れの場所。

## 2. プペ・ダンス

新カジノ・フォーリーが解散した後、エノケンは昭和5(1930)年11月、浅草の玉木座開場にもない結成された「プペ・ダンス」に参加する。この劇団名は、「踊る人形」という意味である。メンバーには、柳田貞一をはじめ、浅草オペラ時代にいたメンバーや電気館で人気だった役者たちが顔をそろえ、また昭和5年11月に二村定一が加わったことで、ジャズ歌唱がさらに充実する。彼がエノケンとの掛け合いで歌ったコミック・ソングは多くの人々に楽しまれた。

レヴュー作品「世界漫遊」の音楽リストを見ると、最新の流行曲をいち早く取り上げていることがわかる。「世界漫遊」は前後編で、脚本は菊谷榮、昭和6年11月に公園玉木座で上演された。構想の基本は帝劇女優劇、宝塚レヴュー様式を模倣している。宝塚からは、「バリ・ゼット」の内容の1部をそのままパロディーとして書き直すということまでやっていた。この中では、中国、インド、ロシア、オーストリア、ハンガリー、チェコ、ドイツ、フランス、スペイン、モロッコ、イタリー、イギリス、アメリカの13カ国を巡り、各地の音楽とダ

ンスを披露することになっている。音楽は、民謡、歌曲、シャンソン、カンツォーネ、ジャズ、ダンス曲など、30曲あまりが使われていた。このように多種多様な音楽がこのレビューに取り入れられ、さらには、音楽の話題を使ってコントをするなどということも行われていた。

エノケンが昭和6(1931)年にプベ・ダンスを脱退し、いよいよもっとも音楽活動が充実していたと言われる「ピエル・ブリアント」時代に入る。プベ・ダンスに参加していたのはわずか1年だったのである。

### 3. ピエル・ブリアント

エノケンがプベ・ダンスを脱退した後、浅草オペラ館でピエル・ブリアントを結成する。この劇団は、座員150人、オーケストラ部員25人、文芸部8人という日本一の規模をもつ喜劇劇団だった。昭和7(1932)年には、松竹の専属となっている。

興行は基本的に1日2回、半月公演で1回の演目は4本。エノケンは後半の2本に出演する。演目は過去にやったものを改訂して行う場合もあったが、エノケンの方針は「新作絶対主義」だった。ただし、好評を得た演目は続けることもあった。例えば、「カルメン」、「民謡六大学」、「流行歌六大学」、「らくだの馬さん」などが挙げられる。その多くは菊谷榮が書いたものであった。

ピエル・ブリアントは当時、宝塚、松竹など多数の人員を抱えた少女歌劇団を例外にすれば、全てのレビュー団の中で音楽的にもまたダンスの面でも最も優れているという定評があった。それはこのレビュー団が抱えている管弦楽団の音楽の取り入れ方が、新しいということに一因していた。そして彼らの演奏は海外からくる新しい曲のスコアを簡単にこなしてみせるほどレベルが高いと言われていたのである。

ピエル・ブリアントのバンドとはどのようなものだったのだろうか。1935年当時の編成は、トランペット4人、サクソ4人、トロンボーン2人、ヴァイオリン3人、ギター1人、ピアノ2人、ベース2人、ドラム2人で、合計20人のバンドであった。当時のジャズバンドは、ダンスホールに出演する際の9人編成が最大で、各劇団のバンドもそれくらい、宝塚や松竹レビューのオーケストラも12、3人くらいだった。このことからピエル・ブリアントのバンドがいかに大きかったかがわかる。

舞台ではどのような音楽が使われていたのだろうか。菊谷榮の書いたオペレッタレビュー「大学無宿」(昭和9年3月 浅草松竹座)を取り上げてみる。

「大学無宿」の中で使われていた曲は次の3つである。

Das ist die Liebe der Matrosen 「水兵の恋」というタイトルで学生に人気の歌。

GOLD DIGGERS アメリカ映画「ゴールド・ディガース」の歌。

Parlez-Moi D amour 「きかせてよ、愛の歌を」というシャンソン。

このようにドイツ、アメリカ、フランスというばらばらな国の歌が1つの舞台に取り込まれている。

昭和9(1934)年から、新しいイベントが舞台に取り入れられた。幕間の楽しみとして菊谷榮が企画した「ライト・コンサート」と呼ばれるもので、20分程度のステージを歌や踊りで構成するヴァラエティーである。この企画は、音楽を純粹に聴けることなどから、好評だったらしい。昭和10年の2月のコンサートでは、当時人気のジャズピアニストであった和田肇がゲストとして迎えられた。これがきっかけで、和田は8月のレビューにもゲスト出演する。彼はオペレッタ「大西洋孤踏曲」で「ラプソディ・イン・ブルー」を演奏した。その

他、このコンサートで演奏された曲としては、「黒い瞳」「流線ラグ」「イエス・イエス」などがあげられる。

以上のように好評だったこの「ライト・コンサート」は昭和 11(1936)年以降、プログラムから消えてしまう。経済的に苦しくなった音楽部の大移動がその要因のひとつにあったと考えられる。

ともあれ、エノケンの活動の中で最も規模も、人員も、音楽性も充実していたのが、このピエル・ブリアント時代といえるだろう。

## エノケンのその後

---

昭和 13(1938)年、エノケンは松竹を退社し、東宝と専属契約を結んだ。それに伴い劇団名も「東宝榎本健一一座」に改められることになる。南無阿弥陀仏の念仏をジャズソングにのせて歌う映画『エノケンの法界坊』は、一座の東宝入社第一作品である。東宝入りしてからのエノケンは、一年の内、約7ヶ月を舞台に、残りの5ヶ月を映画にあてていた。ピエル・ブリアント管弦楽団は一応解散し東宝管弦楽団に合体させられたが、ジャズに対して熱い思いがあったエノケンは、昭和 14(1939)年、別個に自らのポケットマネーを出し「エノケン・ディキシーランダース」というバンドを編成する。トランペット、クラリネット、アルトサクソ、テナーサクソ、ピアノ、ベース、ドラムの編成で一流のメンバーを集めたバンドは、14年12月から日比谷映画劇場で出演した。昭和15年に入り一部編成を替えてのデビュー公演は日比谷公会堂で行っている。エノケンがポケットマネーをはたいてまで作ったこのバンドも、軍国主義化の圧力のもとで、まもなく解散してしまう。

昭和 20(1945)年8月、日本が敗戦したことにより世の中は大きく変化する。しかし残念ながらエノケンをはじめ、戦前戦中のレヴュー式喜劇、軽演劇はこの節目に充分に対処することができなかった。しかし東京宝塚劇場や新宿コマ劇場の喜劇において、確かにエノケンは常になくしてはならない存在だった。

こうしてエノケンは日比谷の有楽町に進出することになる。このエノケン劇団は、五年後には脱疽による左足の切断によって解散に追い込まれてしまう。しかしリハビリを経てエノケンは再起し、特製の動かしやすい義足をつけて、TVや舞台に臨んだ。亡くなる前年まで、入退院を繰り返しながらも、映画やTV、舞台で活動を続けたのである。そして1970年1月7日、最期まで舞台に身を捧げた彼は、肝硬変のため日本大学駿河台病院にてこの世を去った。享年 65 歳であった。



- ・ 池田憲一『昭和流行歌の軌跡』 白馬出版 1985年(請求番号 C8-500)
- ・ 井崎博之『エノケンと呼ばれた男』 講談社 1985年(請求番号 C9-253)
- ・ 大倉徹也、小沢昭一『小沢昭一的流行歌・昭和の心』 新潮社 2000年(請求番号 C64-902)
- ・ 木村菊太郎『昭和小唄(その一)』 演劇出版社 2003年(請求番号 J100-598)
- ・ 雑俎野浅草六区はいつもモダンだった オペラ・レヴュー・ストリップ』 朝日新聞社 1984年(請求番号 C9-358)
- ・ 東京喜劇研究会編『エノケンと<東京喜劇>の黄金時代』 論創社 2003年(請求番号 J100-289)
- ・ 東宝五十年史編纂委員会編纂『東宝五十年史』 東宝株式会社 1982年(請求番号 J79-313)
- ・ 南博+ 社会心理研究所『昭和文化 1925-1945』 頸草書房 1987年(請求番号 J72-890)
- ・ 瀬川昌久『ジャズで踊って』 サイマル出版会 1983年(請求番号 C36-533)
- ・ 『日本のうた 第一集』 野ばら社 1998年(請求番号 F20-701)
- ・ 『夢を描いて 華やかに 宝塚歌劇80年史』 宝塚歌劇団 1994年(請求番号 J98-891)

<CD>

- ・ 『浅草オペラ珠玉集』 カメラータ (請求番号 XD4591)
- ・ 『浅草オペラ 華ひらく大正浪漫』 山野楽器 (請求番号 XD40697)
- ・ 『榎本健一大全集 甦るエノケン』 東芝EMI (請求番号 XD11546)
- ・ 『エノケン芸道一代』 キング (請求番号 XD53406)
- ・ 『Enoken meets Toriro』 東芝レコード (請求番号 XD53438/53439)
- ・ 『エノケンの大全集<完結編>』 東芝EMI (請求番号 XD53404)
- ・ 『エノケンのキネマソング』 東芝EMI (請求番号 XD53405)
- ・ 『唄うエノケン大全集 蘇る戦前録音編』 ユニバーサルミュージック (請求番号 XD53411)

<DVD>

- ・ 『エノケン・笠置のお染久松』 東芝EMI (請求番号 VE681)
- ・ 『エノケンのホームラン王』 東芝EMI (請求番号 VE682)
- ・ 『エノケンの捕物帖』 東芝EMI (請求番号 VE683)
- ・ 『エノケンの拳闘一代記』 東芝EMI (請求番号 VE684)



図書館展示  
2004.11.10~12.18



エノケンさんに会いにゆこう！

榎本健一 1904-1970